

たい。

●二〇一四年の出来ごとから

子どもの本にかかわる話題としては上橋菜穂子が、まど・みちお、赤羽末吉につづき国際アンデルセン賞・作家賞を受賞した。

上橋作品は日本で子どもと大人に共有される幅広い魅力をもっていた。

その特色は「世界の多様性、価値観の相対性を語り、戦うべきは悪ではなく状況であることを示し、困難に負けない子どもとそれを支える大人の存在を描き、生きることの肯定感を読者の胸に届けている」『物語のかなた 上橋菜穂子の世界』藤本英二（久山社）点にあるのだと思う。

国際的に日本のファンタジーとしての作品世界が共感された魅力もこの点にあったのではないかと考える。

受賞後の作品として『鹿の王』上・下巻（KADOKAWA）が刊行されベストセラーになった。この物語は北方の王国間の闘いのなかで自分の国が敗れ奴隷となって岩塩鉱にながれていたヴァンとすぐれた医師師ホッサル、このふたりの男性を主人公に「自分の体ほどわからないものはない。その不思議から生まれた」という文字通り重厚長大な作品であった。

これまで、その作品が多くの子どもたちにしたしまれて

きたまど・みちお、古田足日両氏がそれぞれ旅立たれた。

まどさんの「ぞうさん」「ねんせいになったら」「てんぶらびりびり」など子どもから大人までどれほど楽しませてもらったことか。

まどさんの詩に「石ころ けったら／ころころ ころげて／ちょこんと とまって／ぼくを 見た／——もって けてと いうように」（「石ころ」という作品があるがどんな小さなものでもじっとみつめていると宇宙につながっている広い視野に気付かせてくださった。また「ちがっても仲良くしようではなく、ちがうから仲良くしよう」という立脚点を大切にされていたことも記憶に残る。

古田氏は戦後の創作児童文学の歴史の中で作家として、評論家として残された足跡は実に大きかった。本誌二〇一五年一・二月号でも「追悼 古田足日」が特集されているが古田氏の多面的活動の中でも私は、評論のおもしろさを味わわされたことが得難いことだった。例えば『児童文学の旗』（理論社 一九七〇年）の序章は「ふしぎの国に旗はひるがえるか」というタイトルだった。このことばから、イメージされるあれこれをよく反芻したものだ。また文中「ぼくは、この意見には異論がある」とか「この言葉に賛成できない」「このことばにひっかかる」などと出てくると「それはいったいどの部分で、どうして？」と興味をそそられた。気になっても立ちどまって考え合うより、